

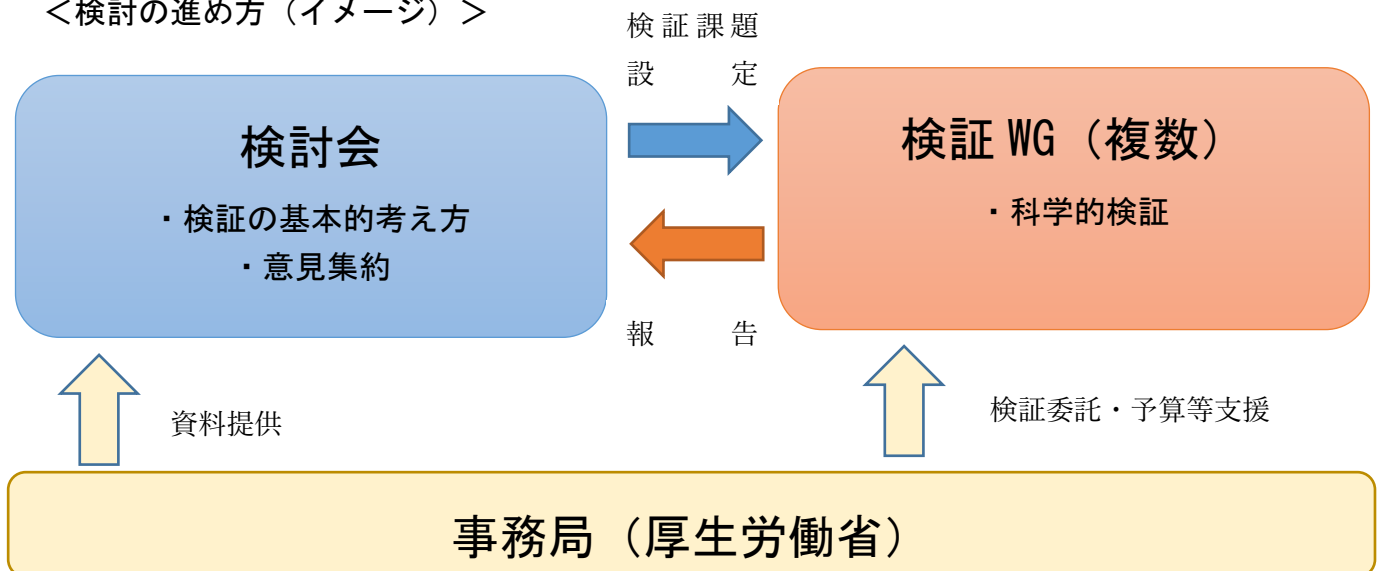
第一種健康診断特例区域等の検証における課題について（案）

1 検証の基本的考え方（案）

- 原子爆弾被爆者対策基本問題懇談会意見報告に基づき、科学的・合理的な根拠を追求する。
- 原爆投下より75年が経過し、関係者が高齢化していることを踏まえ、検証可能な課題を可能な限り細分化し、並行して迅速に検証を進めていく。
- 今般の検証の目標は、これまで行われてきた検証を踏まえた上で、以下の2点を検証課題として設定する。
 - ・ 原爆由来の放射性物質を確認する課題
 - ・ 健康影響が生じているか確認する課題
- 第一種健康診断特例区域等の検証に関する検討会（以下「検討会」という。）においては、検証課題を整理する。具体的な検証は、別途設ける検証ワーキンググループ（WG）にて行い、必要に応じて、相互に連携をとりながら、科学的な知見を取りまとめる。

本検討会は、これらの検証の進捗・成果を踏まえ、第一種健康診断特例区域の在り方等について意見を集約する。

<検討の進め方（イメージ）>



2 具体的な検証課題（案）

○ 原爆由来の放射性物質を確認する課題

① 気象シミュレーション

<目的>

- A) 雨の降った地域・雨量の検証
- B) 雨による原爆由来の放射性物質の分布の検証
- C) B)を踏まえた地域住民の被曝量の推計

<概要>

気象学、環境工学、爆発の専門家、放射線物理学、放射線防護学・生物学の専門家等により集学的な検討を行う。

平成 22 年の広島“黒い雨”放射能研究会の報告において、青山道夫氏が論点を整理しているが、当時は 1945 年当時の全球データ（地球全体の気象データ）が整備されておらず、シミュレーションが実現できなかった。2010 年代にヨーロッパ中期予報センター（ECMWF）により、過去 100 年間の全球データが整備されたことで、今般の検証可能性が見いだされている。

本検証では、原爆投下当時の地形だけでなく、土地利用なども調査し、原爆の熱線から発生した火災による上昇気流なども加味し、原爆投下後の気象状況を再現するモデルを構築していく。後述する②土壌調査と連携し、実測値によるシミュレーションの妥当性の検証を繰り返しながら、気象シミュレーションを精緻化していく。まずは、原爆投下後の雲の生成から、雨の降雨までのシミュレーションを目標とし（目的 A）、その後、どのような放射性物質がそれに伴って飛散したか（目的 B）について検討を進める。最終的に、それら放射性降下物が人体に及ぼしうる影響について推計を試みる（目的 C）。

② 地域の土壌調査

<目的>

原爆由来の放射性物質の検出とその量の把握

<概要>

過去の調査結果（昭和 51 年、昭和 53 年、平成 3 年、平成 24 年等）をレビューすることから始め、現時点で実行可能な放射性物質の検出方法について検討する。また、過去の調査を参考に、①気象シミュレーションとも連携し、現地の土壌調査について企画し、原爆由来の放射性物質の検出とその量の把握を目指す。

③ 原爆投下時の気象状況等に関する文献等調査

<目的・概要>

米国公文書館等に、原爆投下時の気象予測等に関する文献やデータがないか調査を行う。該当文書が見つかった場合は、①気象シミュレーションの検証に活用する。

○ 健康影響が生じているか確認する課題

④ 広島赤十字・原爆病院におけるカルテ調査

<目的>

広島赤十字・原爆病院に保管されているカルテのうち、被爆状況で、雨への曝露を述べられている方について、疾患罹患状況等の調査を行う。

<概要>

広島赤十字・原爆病院には、被爆者約5万人分のカルテが保管されている。原則 PDF 化の上、一部の項目（例：氏名、年齢、被爆状況）については、データ化されており、検索が可能な状況となっている。

まず、保管されているカルテ全体像について把握すると共に、被爆状況で雨に曝露した者の疾患罹患状況（罹患時期、罹患した疾病名等）について特異な点がないか調査を行う。

⑤ 広島原爆体験者に対する相談支援事業受診者の疾患罹患状況の統計解析、アンケート調査

<目的>

国が広島県及び広島市に委託し実施している広島原爆体験者の相談支援事業を受診している者について、疾患罹患状況等の調査を行う。

<概要>

広島の拡大要望地域においては、平成25年度より健康相談事業が展開されている。本事業受診者に説明・了解を得た上で、過去の医療機関受診記録等を調査し、疾患罹患状況について特異な点がないか調査を行う。

また、広島県とも協力し、がん登録を活用するなど各地域のがん罹患状況を年齢区分別に集計するなど、当事者に負担のかからない方法での検証も合わせて検討する。